

Interview

鏑木 蓮さん

心療内科医が心の謎を解く
希望のミステリー
シリーズ第一弾が文庫化

取材・文=田北みずほ 撮影=水野真澄(人物)、富本真之(書影)

かぶらぎ・れん

1961年京都市生まれ。2006年に『東京ダモイ』で第52回江戸川乱歩賞受賞。著書は『屈折光』『時限』『思い出探偵』『エンドロール』『白砂』『見えない鎖』『黒い鶴』『救命拒否』『真友』『喪失』『残心』など多数。近著は限界集落の風景を撮るカメラマンの失踪の謎を探る『水葬』。



『見えない轍』
心療内科医・本宮慶太郎の事件カルテ

潮出版社/880円(税込)

人間そのものに焦点を当て、人生の謎の不思議を描いたミステリーを世に送る鏑木蓮さん。2019年に刊行された心療内科医・本宮慶太郎シリーズの第一弾『見えない轍』が文庫になって帰ってきた。

「あらためて作品を読み込み、新しい情報を反映させたり、読みやすく表現を工夫したりと手を入れました。より伝わりやすくなっていると思います。どこにでも持っていて、いつでも読めるのが文庫の魅力です。好きな場所で開いて、心にひっかかる言葉や場面を見つけてもらえたら」

主人公の慶太郎は、京都の小さな町でクリニックを開業する心療内科医。経営はうまくいっているとは言いが、なんとか踏ん張っている。ある日、女子高生の棚辺春来がクリニックを訪れる。彼女の不調の原因は、スーパーに勤める小倉由那という

女性の死だった。春来の訴えをきっかけに、慶太郎は真相を探ろうと動き出す。

食品ロスに頭を痛めるスーパー経営者の二代目、子育てしながら仕事に打ち込む先輩、脚本家の夢をもつ同僚、由那とつながる人たちは、悩みや苦しみと格闘しながら、夢をつかもうともがいていた。

「心療内科医だからこそ、人の話をじっくりと聞き、心にアプローチできる。人はみんななんらかの傷をもっているものです。慶太郎はだれもが抱える心の荷物を軽くしてあげられる存在。読者の心にも、癒しをもたらすことができると思います」

文庫版のお楽しみとして見逃せないのが、海原純子さんの解説。現役の心療内科医ならではの鋭い洞察で作品を読み解く。「こちらの思惑がすべて見破られました」と鏑木さんも舌を巻く。

ミステリー小説とはいえ、謎が解けたら終わり、ではないのが鏑木作品の特徴。本を閉じたあと、登場人物の気持ちに思いを馳せていくと、自分はどう生きていくのかも考えが及ぶだろう。

「作品を読んで、少しでも視点や行動が変わったという声を聞くとうれい。そうできるのが物語の力だと思っています。『読者の心を善の方向へ、太陽の方向へと向けていく』というのが私の目指すところです。何があっても前へ進む、生きていくという希望の光を送るミステリーを描いていきたいです」